

### Ⅲ 協議 I

#### 1. 振興調査に関する報告・協議

- (1) 実験実習費に関する調査
- (2) 農場基盤及び施設・設備の整備に関する調査
- (3) 実習助手の実習教諭免許取得に関する調査
- (4) 農業最先端技術（スマート農業等）研修に関する調査
- (5) 各学科の教員配置数に関する調査

#### 2. 農業教育振興に関する協議・要求・要望

### Ⅳ 協議 II

農業教育関係機関等との協議

### Ⅴ 陳 情

国会議員並びに関係省庁

[第2日]

#### I 研究発表・協議会（研究局）

○園芸部会

埼玉県立羽生実業高等学校

長 島 肇

○農業土木部会

栃木県立宇都宮白楊高等学校

菅 井 誠 司

#### II 指導講評 <要 旨>

講師 文部科学省 初等中等教育局 参事官  
(高等学校担当)付  
産業教育振興室 教科調査官  
国立教育政策研究所 教育課程研究センター  
研究開発部 教育課程調査官

鈴木 憲 治



(指導講評される鈴木憲治先生)

昨年度から新型コロナウイルス感染症により、学校現場においても大変厳しい状況が続いているところですが、農業高校の先生方には、農場の管理運営や実習指導等、御対応いただいておりますことに感謝申し上げます。また、発表いただいたお二人の先生方におかれましては、期末考査あるいは成績処理の時期でお忙しい中、御準備いただきましてありがとうございました。指導講評の時間をいただいておりますが、時間がかかり押しているため、急ぎ足となることお許しください。

まず、農業高校の現状についてお話しします。令和2年度学校基本調査によれば、全国の農業高校数は全日制、定時制を合わせて303校で、前年度と比較して増減はありませんでした。学科数については学校数の減少や小規模化に伴い、設置される小学科の数はほとんどが減少している一方、しばらく横ばいだった畜産関係学科がここ2年で増加しているほか、その他の学科として地域資源の活用や地域創生、ヒューマンサービスに関する学科が増加傾向にあります。令和2年度の全国の農業高校の生徒数は75,260人であり、少子化に伴い減少傾向にあります。高校生全体に占める農業高校生の割合は2.4%で、この割合の推移はここ10年ほぼ横ばいです。農業高校の女子生徒の割合は増加傾向にあり、農業高校全体としてはほぼ半数を占めています。生活科学関係以外では、食品科学関係(65.1%)や畜産関係(59.8%)において特に女子の割合が高くなっています。進路状況については、指導主事調査を基に資料を作成しましたが、進学者の割合は47.7%、内訳は4年生大学10.0%、短大4.6%、専修学校28.5%、農業大学校・特別専攻科4.7%となっています。一方、就職者の割合は50.3%で、関連産業17.8%、公務員3.4%、その他の産業27.2%となっています。また、就農者数等については専業農家0.4%、農業生産法人1.4%、兼業農家0.1%、就農を目的とした進学・研修等5.3%で合わせると7.3%となります。卒業生の就農率の低さが指摘されることが少なくありませんが、農業高校における生産系学科の生徒の割合を考えれば、この数字はそれほど低いわけではないようにも思います。また、学校基本調査によれば、全学科(普通科、総合学科、専門学科)の農業・林業への就職者数に占める農業科の割合は53.4%となっていることから一定の役

割は果たしているものと考えます。また、指導主事調査によれば、農業高校への求人数に占める農業生産法人等の求人数の割合は1%強しかなく、非農家出身で生産基盤を持たない生徒が卒業後就農を目指す上でもこうした求人が増えることが望まれます。

次に、教員の確保と資質向上についてです。過去5年間の教員免許授与数は専修免許状が約30件、一種免許状が420件、合計450件でした。高校農業一種免許取得可能な大学は57大学あるが（令和2年度）、これらの大学・学部の募集定員に対する高校農業一種免許取得者の割合はわずか3%強に過ぎないことが分かります。したがって、教員確保についてはまず、取得者数を増やすことであり、合わせて農業高校においても教員を目指す生徒を育て、大学に進学させることも必要であろうと考えます。教員の資質向上について、農業クラブ指導者養成講座の中で先生方に話した内容をお伝えしたいと思います。今年度の指導者養成講座では「授業で取り組むプロジェクト学習」をテーマに研究協議が行われました。プロジェクト学習については、学習指導要領（平成30年告示）解説【農業編】第2章農業科の各科目 第1節 農業と環境 第2 内容〔指導項目〕（1）イの「プロジェクト学習の方法と進め方」の部分に、「生徒が主体的、計画的に実践して課題を解決するプロジェクト学習について取り上げて指導する。プロジェクト学習は一般的に、①あるべき姿を見だし、現状を把握して問題を抽出し、学習目的と達成目標を明確にして課題を設定すること（課題設定）、②仮説を設定し、解決方法の手順を考えて目標達成のための計画を立てること（計画立案）、③計画に従って継続的に実行すること（実施）、④実行の過程や結果を考察して検討し、まとめること（反省・評価）の4段階で構成される。」と記載されています。プロジェクト学習を通して、専門的な知識・技術や思考力・判断力・表現力、学びに向かう力や人間性など、生徒の資質・能力をいかに育成していくかが非常に重要だと思います。また、FFJ ナビゲーターのp.14には発表活動を通して、知識・技術、思考力、判断力、実践力、学習意欲、プレゼンテーション能力などを高める狙いや効果があることが記載されており、学習指導要領で示された育成すべき資質・能力と共通してい

ることが分かります。また、農業クラブの全国大会のプロジェクト発表で最優秀となった発表やFFJ 検定のプロジェクト報告書の中で特に評価が高くなったのを見ると、①研究テーマは意外とシンプル、②テーマ設定に至る背景が明確、③研究の着地点（仮説）が明確、④研究計画がしっかり立てられている、⑤考察が科学的根拠に基づいている ことなどが共通して挙げられます。一方で、FFJ 検定のプロジェクト報告書では、これらが不十分で、改善の余地があるものが多いのも事実です。さらに、農業クラブ全国大会 南東北大会の報告書に目を通した際、特に問題が難しいわけではないにも関わらず、正答率が極めて低い問題が農業鑑定競技のどの分野にも見られました。私は食品が専門なので食品の分野を例に挙げると「食品製造」、「食品化学」のどちらの教科書にも出てくる内容や、基本的な計算問題です。各学校では、農業クラブの指導が大会のための指導に終始していないでしょうか。農業高校においては、生徒全員がクラブ員であり、農業科教員全員が農業クラブの指導者です。農業クラブ活動の充実・活性化の第一歩は、普段の授業の充実にあると意識し、各種大会・競技会の結果や資格・検定の結果、研究・研修や地域交流の報告書・レポートなどから、授業における指導事項や指導計画、指導方法を評価し、工夫・改善を図りながら、授業の充実、農業クラブ活動の充実につなげていただきたいと思います。また、生徒の自己肯定感も課題に挙げられていましたが、農業クラブの大会等では選手だけでなく、運営する立場の生徒であっても達成感や成成感がありますし、マイスター顕彰制度、地域活動など、農業クラブのあらゆる活動が自己肯定感を与える機会となり得ると考えますので、そうした視点からも指導に当たっていただきたいと思っています。

最後に学習評価についてです。学習評価について、観点別評価の考え方や評価規準については校長会や指導主事会、各種研究協議会等でお話しさせていただいたところであり、各学校においてはすでに準備を進めているところかと思いますが、これまでに先生方から問い合わせがあった部分など含めて、補足させていただきます。まず、多く問い合わせがあるのは各観点の重み付け（三観点の比率を変える）もあり得るのかとった内容です

が、これについては「高等学校学習指導要領解説【総則編】」p. 38に「知識及び技能（技術）」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」が偏りなく育成される旨が書かれています。加えて、p. 39には「これらの三つの柱は、学習の過程を通して相互に関係し合いながら育成されるものであることに留意が必要」とも書かれていることから、評価における各観点の重み付けは想定しておりません。観点別学習状況の評価に係る記録の総括の仕方や、観点別学習状況の評価の評定への総括については、『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料」の第1編に記載されておりますし、第3編の事例でも触れています。第3編事例では「農業と環境」を取り上げましたが、農業科目においては特に「知識・技術」の観点の評価について、知識とともに必要な技術についても身に付けさせることが重要であることから、観点別学習状況の評価に係る記録の総括においても知識と技術を同等に扱って総括しております。また、第3編では指導と評価の計画や各観点を評価するための実習記録用紙の工夫などについても記載してあります。指導主事会等でも説明したので、すでに各都道府県で伝達されたかあるいは今後伝達があるかと思えます。『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料」については、すでに国研のホームページからダウンロードできますので、まだご覧になっていない先生におかれましてはぜひお読みいただきたいとお願いたします。

最後になりましたが、先生方の御活躍と各学校における農業教育の一層の充実発展を御期待申し上げ、指導講評とさせていただきます。

### Ⅲ 講演 <要旨>

演題 「農業を強くするブランドづくり」

講師 静岡県立大学 経営情報学部 教授・

学長補佐・地域経営研究センター長

博士（農業経済学） 岩崎 邦彦



（講師 岩崎 邦彦先生）

#### <要旨>

「品質には自信があるのに、うまくいかない」

農業の現場で、このような言葉を聞くことが頻繁にあります。品質が同じだとしても、選ばれる商品と、選ばれない商品があります。選ばれるのは、「強いブランド」です。

では、どうすれば強いブランドが生まれるのでしょうか？

強いブランドは、成り行きまかせではできません。戦略性と創造性をもって、つくりあげるものです。

この講演では、農産物のブランドづくりの羅針盤を、調査データと実践例を交えながら考えていきたいと思います。

#### <経歴>

静岡県立大学 経営情報学部 教授・学長補佐・地域経営研究センター長

博士（農業経済学）

専攻は、マーケティング。とくに、地域に関するマーケティングを主な研究テーマとしている。これらの業績により、日本観光研究学会賞、日本地域学会賞、世界緑茶協会 学術研究大賞、財団法人商工総合研究所 中小企業研究奨励賞などを受賞。著書に、「地域引力を高める 観光ブランドの教科書」「農業のマーケティング教科書：食と農のおいしいつながり」「小さな会社を強くするブランドづくりの教科書」「引き算する勇気：会社を強くする逆転発想」（いずれも日本経済新聞出版社）などがある。

公職は、静岡県地域づくりアドバイザー、中小企業診断士 国家試験委員、世界緑茶協会 世界緑茶コンテスト審査委員、静岡市商業振興審議会 会長、静岡市 茶どころ日本一委員会 委員長など多数。公益財団法人全国学校農場協会のホームページ (<http://www.no.jokyokai.or.jp/>) でも御視聴できます。